

喪失と清景

黒田眞美子著 『韋應物詩論 「悼亡詩」を中心として』

水津有理

二〇〇七年、陝西省西安市長安区で一人の唐代詩人の墓誌が発掘された。盛唐の王維・孟浩然、また中唐の柳宗元とともに「王孟韋柳」と併称され、唐代を代表する自然詩人の一人に数えられる韋応物（七三五？—七九〇？）のものである。このときみつかったものの中には、詩人自身の手になる妻・元蘋（七四〇—七七六）

の墓誌が含まれていた。安史の乱による長安陥落の年（七五六）に結ばれ、二女一男をなしてその後の二十年をともにした妻の墓誌には「余は年強壯（四十歳）を過ぎ、晩にして傷み易し。昏を望みて門に入る毎に、寒席に主無し。手沢衣膩、尚ほ平生を識り、香奩粉囊、猶ほ故処

に置く。器用百物、復た視るに忍ばず。況んや生きては貧約に処り、歿しては第宅無きをや。永しへに以て負と為す」と記され、詩人にとって世界の崩壊にも等しかった盛唐の「太平の世」の終わりから共に手を携えて生きてきた女性に対する、深い喪失の思いが述べられているという。

韋応物は元蘋の死後十年の長きに渡り、折に触れ、景に触れ、妻の死を悼む「悼亡」の詩を詠い継いだ。その十年は、韋応物の創作意欲が最も盛んであった時期に重なる。韋応物の「悼亡」の詩は、現行『韋蘇州集』巻六「感歎」に十九首の連作詩であるとして収められるが、

黒田眞美子氏はさらに「寄贈」「行旅」「雜興」などに各々分類された作品のなかに十四首の「悼亡」の詩がみとめられると指摘する。現存五百五十余首のうち三十三首。『韋應物詩論「悼亡詩」を中心として』（汲古書院二〇一七）は、この「韋悼」三十三作を詳細に分析することにより、従来、自然詩の妙手として知られ、その詩境を「清」あるいは「幽」、またその特色は「景情融合」にあると評されてきた詩人が、感傷文学の系譜においても一定の地位を占める存在であることを示し、また自然詩における韋応物の詩境の創造に、妻の死による喪失の哀しみが深くかかわっていたとして、その論証を試みたものである。

悼亡詩は西晋の潘岳を嚆矢とし、六朝から隋にかけて散見されるも、初盛唐には見当たらない。その途絶えていた流れを継ぎ、新たな局面をひらいたのが中唐の韋応物である。その作品群は先行悼亡詩のみならず、「長門の賦」などの「思婦」の作や「古詩十九首」などを受容・継承し、ときに反転的に踏襲しつつ、「模擬という営為を十全に駆使しながら新たな創造を試みた」。その創造の試みはたとえば、妻や遺された子の形象を織り

込み、夢のモチーフを導入するなど内容的な新しさとしてもあらわれている。これら韋応物の成果は後に中唐の元稹、北宋の梅堯臣の悼亡詩に連なり、古今の系譜をつなぐ重要な役割を果たしている。以下、著書中に引かれるいくつかの作品を引きながら、些か簡略ではあるが著者の論考のあとを追ってみたいと思う。

不復見故人 復た故人を見ざるに

一來過故宅 一たび来たりて故宅を過る

物變知景暄 物変はりて景の暄かなるを知り

心傷覺時寂 心傷みて時の寂しきを覺ゆ

池荒野筠合 池荒れて野筠合し

庭綠幽草積 庭緑にして幽草積もる

風散花意謝 風散じて花意謝しほみ

鳥還山光夕 鳥還りて山光夕たり

宿昔方同賞 宿昔方に賞を同にするも

詎知今念昔 詎ぞ知らん今昔を念うを

……

この作品「昭国里に故第を過る」（韋悼10、卷六）は、詩人が妻の遺品を収めるために旧居を再訪した折の情景

を詠つたものである。「昭国里」は長安朱雀門大街から東第三街にある坊里で、ここに詩人が妻と最後に暮らした官舎があった。黒田氏は、妻在りし昔日の歡びを、その歡びが喪われた今の哀しみから詠うという今昔の對比が、韋悼においては「空間の移動」を伴うものであると指摘し、「その往還の中で詩人は現実の時空を超えた幽

なる世界に入つて行く」と述べたうえで、今昔を往還しつつ創出される韋応物の詩的空間を「ノスタルジックな時空」と呼ぶが、ここにも「旧居の再訪」という形で空間を移動しつつ、喪われた時間に足を踏み入れていく詩人の形象が描かれる。この再訪は、妻の亡くなった冬があけての春。暖かな陽射しに季節の移ろいを感じ、ふと見れば「主無き旧宅の庭は荒れ果て、池のほとりの野生化した植物は伸びるに任せ、緑濃い草も鬱蒼と茂っている」(第五・六句)。「同じこの庭を『宿昔』は二人で『同に』美しさを『賞』したのに今、まさか一人で昔を偲ぶことなるうとは」(第九・十句)。眼前にある春の庭、かつて妻と眺めたその美。今昔が二重写しになったこの空間は、春の美景にもかかわらず、廢園の美を湛えたどこか荒涼とした景觀として描かれている。

この「昭国里」再訪の詩にも「風散じて花意謝み、鳥還りて山光夕たり」と風と光が描き込まれているが、著者はまた、詩人の自然詠の多くに風が吹いていると指摘する。韋悼における例の一つとして示される「除日」(韋悼6)について挙げられるのが「芳樹に対す」(韋悼7)である。

迢迢芳園樹 迢迢たる芳園の樹

列映清池曲 列なり映る清池の曲

對此傷人心 此れに對して人心を傷ましむ

還如故時綠 還た故時の綠の如し

風條灑餘靄 風条余靄を灑らし

露葉承新旭 露葉新旭を承く

佳人不再攀 佳人は再びは攀ぢざるも

下有往來躑 下に往來の躑あり

「長安の曲江池を思わせる屈曲した池畔に果てしなく樹木が連なり、清らかな水面を緑に染めている」と詠い出されるこの作品の第五・六句には、朝もやの名残りを散らす風と、葉上の露をきらめかせる日の光が描かれる。「春風は池にさざ波を起こし、光の粒子が露から零れるように、水面は銀色に揺れている」——この情景

は、韋応物の自然詩の特徴である「清」なる美景である。しかしそれはかえって詩人の心を哀しませる。なぜなら「昔と同じようにみえる緑」（第四句）のなかにいた「佳人」はもはや帰らないからだ。かつて溢れんばかりの光と歓びのなかにあつた景が、いま哀惜の情に満たされて眼前にある。「循環して再来する（自然）は、彼にとつては、今だけでなく昔時をも含む、いわば二重写しにして把握されるのである」。

韋応物の「清」なる景——「清景」は、風が「池や露、川といった水分豊かな景物と戯れることよつて光の澄明感を生み出し」構築されるものであるという。「月夜」（韋悼8）は、この「清景」の語を織り込んで、次のように詠う。

皓月流春城 皓月 春城に流れ
華露積芳草 華露 芳草に積もる
坐念綺窗空 坐ろに念ふ 綺窗の空しきを
翻傷清景好 翻つて傷む 清景の好きを
清景終若斯 清景 終に斯の若し
傷多人自老 傷多く 人 自すから老ゆ
月光が水のごとく流れる春の夜。草に置く露は月光を

映してきらきらと光る。その露のように儼く消えた妻のすがた。そのすがたがかつてあつた閨房の窓。ここに描かれる「清」なる景は、かつてそこにいた人の不在、その喪失感と表裏一体のものとして詠われ、故にいっそう美しい。韋応物の自然詠の特色、「景情融合」の実現を象徴するのが「清景」の語であり、そしてその「清景」の語が「妻の死後に初めて詠われるようになったことは、韋悼諸篇が韋詩全体の特徴を方向付ける重要な意味を有することを物語るのではないだろうか」と著者は述べる。哀しみ、ことに持続する哀しみには人の心を浄化する作用があるように思う。「清景」とは哀感によつて浄化された心がとらえた風景ではないだろうか。冴え冴えとした月光、春ののびやかな風、芽吹きをうながす微雨、にじむように広がつてゆく鐘の音。それらが空間を満たしていくとき、ある地点でふと、そこに満ちているものは深い哀惜の情であると気づく。それは詩人が内なる心を外なる世界のなかに見出した瞬間なのかも知れない。その哀惜の景が美として感受される刹那、詩人はふとさらわれるように、現実の世界を越え、時を遡つて喪われたものの在りし日のすがたを追い求める。韋応物のノス

タルジツクな時空——黒田氏の描く韋応物の「悼亡詩」から、そのような詩人の心の軌跡がみえた気がした。

明末清初の詩論家・王夫之（二六一—一六九二）は、詩における景と情の融合を次のように説いている。「情と景は一つは心のなかに、一つは事物のなかにあるという違いはあるが、実は景が情を生み、情が景を生ずるのである。哀樂の情が動けば、榮枯の景がこれを迎える。情と景はそれぞれ互いのうちにあるのだ（情景雖有在心在物之分、而景生情、情生景、哀樂之觸、榮悴之迎、互藏其宅）。また次のようにもいう。「樂景を用いて哀情を写し、哀景を用いて樂情を写せば、その哀樂はいつそう増す（以樂景寫哀情、以哀景寫樂情、一倍增其哀樂）」（ともに『薑齋詩話』卷一¹）。この著書を読了したあと、彼が編んだ唐詩のアンソロジー『唐詩評選』を繙いてみた。韋応物詩は、卷二「五言古詩」に十四首採られ、杜甫（十九首）、李白（十七首）に次いで突出しており、目をひく。他の詩体を見渡しても、李杜以外にここまでの入選は七律の李商隱（十三首）があるのみである。韋応物は王夫之にこのように言わしめた詩人の一人だったのだろうか。

注

（1）原文テキストは『四溟詩話 薑齋詩話』（人民文学出版社 一九六二）による。また訳文は劉若愚・佐藤保訳『新しい漢詩鑑賞法』（大修館書店 一九七二）を参照。